

# 私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

## ● モンゴル 建築のない世界への旅

1995年1月17日に発生した阪神大地震の後、JIA関東甲信越支部メンテナンス部会は直ちに20名程の部会員で調査団を組織し、被災地に向かった。

西宮から神戸市垂水区まで2~3人1組の班を組み、鉄道が不通となった市街地を歩いて踏破し、集合住宅の被害状況を調査し、記録した。

建物の建築年代、壁式かラーメン構造か、S造かSRCかRCかなどの構造形式に分類し、階数、住戸数などの建物規模を調べ、活断層との位置関係や建物の向きなどを記録した。

各建物の被災度を大破、中破、小破、軽微、被害なし、倒壊などに分類し、その原因を分析した。

これら集合住宅の200件以上の被災事例をA-4版203頁にまとめ「阪神大震災写真集、被災した集合住宅」を1995年3月末に出版した。

帰京後、関東の管理組合やマンション居住者などを対象に、JIAメンテナンス部会や住宅金融公庫、自治体などを通じて報告会を開催した。

マンションの地震被害報告は大きな反響を呼び、初版本、3000部はすぐ売り切れ、第2版、第3版を発刊した。出版社などの求めに応じて、リフォーム業者や管理会社、材料メーカー・デベロッパーなどを対象とした報告会にも対応した。

1995年は、地震による建物被害と対策に関連した活動に追われ、疲れていた。

建築のない世界に行きたい！

1996年、JIAから、モンゴルの建築家との交流会と、モンゴルのツアーへの参加が呼びかけられた。

広大な草原に羊や馬などを移動させながら生活する遊牧民の世界は、阪神大震災の建物被害の分析や報告に追われた私をいやしてくれるものと思われた。

これに参加した。

当時、バブルがはじけ、多くの人々が失職し、新宿の地下街から都庁まで、段ボールハウスで埋め尽くされていた。段ボールハウスは巨大地震を受けても倒壊し人命を失うような構造ではない。

牧草を求めて移動しながら生活するテントハウスニゲ



遊牧民は牧草を求めて移動し生活する。

短時間に組み立てる50m程の移動式住居は強い地震を受けても、しなやかに建っている。

ルは柳の木を折り畳み式に格子状に編んで円形に壁が組み立てられ造られる。

約50m<sup>2</sup>の空間を、家族で短時間に組み立てるもので、大きな地震を受けてもしなやかに建っていて、倒壊して人体に被害を及ぼさない建物の構造である。

首都ウランバートル近郊の草原で夏祭り(ナーダム)に参加した。はるか彼方の草原から米粒程に見える競走馬が疾走して来て、たちまち目の前を通り過ぎて行った。

モンゴル相撲の力士が草原の中で、もみ合いを繰り広げていた。

バスに揺られて草原を走り、小さな小川に添って建つ数棟のゲルで構成されるホテルに泊まり、強烈に強い馬乳酒を飲み、馬頭琴で奏でる音楽を聴きながら食事をした。

ウランバートルのホテルで食べたロシヤ料理はお世辞にも美味しいと言えなかったが、草原のゲルの中で食べる食事は騎馬民族の伝統的味だった。

騎馬民族のモンゴルと農耕民族の中国・漢民族は万里の長城を隔てて別世界に住み生活している。

農耕民族は大地を耕し食料を得るが、騎馬民族は決して大地を傷つけない。大地の草は羊、ヤギや馬が食べ、人間は大地の草を食べて大きくなった羊やヤギを食べる。

長城を隔てて生活する騎馬民族と農耕民族は、長年生活文化の違いから対立し、競い合ってきた。

後に、中国、北京経由で、内モンゴル自治区の都市フフホトを訪問したことがある。内モンゴル自治区の人口は、漢民族がモンゴル族の2倍ほどで、首都フフホトは樹木が多く、農耕民族の景観が形成されていた。

### みき・てつ

㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。

URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。

建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかつた時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。